

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい



20周年を迎えて

行動に駆り立てるもの…

理事長 丸谷 士都子

地球の木が設立20周年を迎えるにあたり、ボランティアについて考えてみました。ボランティアvolunteerとはフランス語の形容詞volontaire「自由意志の」から派生した英語です。自分の意志で進んでものごとにあたる人のことを指します。私が国際協力活動に携わっている事を昔の友人に話すと、「お金ももらわずにそんなことをやるなんて、理解できない」という人がいます。

何が人を行動に駆り立てるのか、そんなことを考えていたら、地球の木総会の後に開催された「田島征三さんのおはなし会」でひとつの答えを得ました。田島さんは絵本作家であり、廃屋となった学校を自然素材を使って大きな芸術作品にしてしまうようなアーティストでもあります。地球の木と一緒にラオスの森の絵本を作ろうと2年前から懇意にさせていただいている方です。

田島さんは、お話の冒頭、震災の話をされました。1970年代半ばに仙台の若林区の海岸を訪れた時のことです。砂浜には何隻もの船が捨てられてあり、船の墓場のような感じ。その時、この船は私たちが捨てたのだと感じたそうです。第1次産業を切り捨て、次々に工場を立てていった私たちが……。そして同じ浜辺に今回の津波により数百もの遺体が打ち寄せられた。この遺体も私たちが捨てたのではないかと感じ、すぐに木の実を使った作品「砂の墓標」の制作に取りかかり、完成したのは3日後の3月14日でした。今、伊豆の美術館「感無料」に展示されています。

地球の木を支えてきたのもこのような心に強く響くでき

CONTENTS

- 20周年を迎えて ……1
- 幸せ分かち合いムーブメントにあなたも参加しませんか? ……2
- 地球の木設立20周年に寄せて ……3
- Laos支援地報告 ……4
- Cambodia「どうしてなの?無事だった?」 ……5
- 東日本大震災緊急支援報告 ……6
- 鞍山だより「フロムA」第3回 ……7
- 地球の木カフェ 鶴見に行く ……7
- 活動日誌 ……7
- INFORMATION ……8



マンガルタール村で歓迎を受ける筆者

ごとだったのでしょうか。世界中で起こっている不条理なできごとを見て、物質的に豊かな私たちの暮らしと比べてみるのはごく自然です。数えきれないほど大勢の人びとの支えがあって地球の木は活動することができました。また、フィリピン、ラオス、カンボジア、ネパールを訪れた会員が、そこで見聞きしたことが出発点になり、何かしなくてはならないと心が揺り動かされ、活動が広がっていきました。皆さまに心から感謝を捧げたいと思います。

先日、東日本大震災で被災した地域を訪れました。そこに生きる若者たちもまた、悲しみに打ちひしがれる間もなく、前向きに地域のためになんとかしようという意気込みで満ちていました。東北に住む人たちに寄り添い、これからも支援を続けていこうと思います。

これからも「ボランティア・スピリット」にあふれる人たちが集い、話し合い、行動していけるような地球の木でありたいと考えています。アジアの人々とつながりながら、共に幸せになることができるような国際協力を進めていきます。新しい方向性としては、カンボジアでは職業訓練センターでのクラフトの製作をきっかけに、地球の木独自のフェアトレードをめざしていきます。20周年記念事業として、オルタナティブな社会や経済のあり方、エネルギーの転換などに関連した講座を開き、話し合う場を作っていきます。

20周年の今年、会報「地球の木」では今回から3号にわたって、ネパール、カンボジア・ラオスの特集を組み紹介いたします。

「幸せ分かち合いムーブメント」にあなたも参加しませんか？

■村人たちの夢の実現に向けて

2007年にスタートした「幸せ分かち合いムーブメント」というユニークな名前のネパールプログラムも、今年で5年目を迎えます。

このプログラムを始めるに当たって、拠点となるマンガルトール村の高校で、生徒、教師、保護者、学校運営委員会の人たちを集めてワークショップが開催されました。「5年後の夢は何ですか？」という問いかけに対して、参加者たちは「10年生を終了した生徒すべてが高等学校に進む機会を与えられる」「高校は図書館を通じた良質のサービスだけでなく、訓練を受けた先生を通して質の高い教育を提供する」「高校はリソースセンターとして、マンガルトール村の小中学校に適切な支援をし、地域のモデル校として認知される」「卒業生は村の地域開発活動を組織し、地域の貧しい人々を支援する」「貧しい家庭が収入を得られるような技術を身につける」「人々はより幸せになる」と夢を語り合いました。

4年間のプログラムを振り返ってみると、参加者たちが着々と自分たちの夢の実現に向かって歩んできたことがわかります。

■奨学生の中から先生が

1か月に500ルピー（約600円）の学費が払えない貧困家庭の高校生に対する奨学生支援は、4年間で延べ58名の高校生に11,12年生（日本の高校2,3年生）の高等教育を受ける機会を提供しました。「奨学金がなかったら、勉強を続けることはできなかった」と生徒たち、保護者たちから喜ばれています。

奨学生の中には、卒業した後、村の小中学校や識字教室の先生になった生徒たちがおり、地球の木は小学校教師3名に対して財政的支援を行っています。地域の言葉を話す先生の存在はとても歓迎されています。



小学校で教える元奨学生のアンジャナさん

マンガルトールの高校生から、17枚の東日本大震災へのお見舞いの絵はがきが送られてきました。

「日本の方々の多くの命が失われたことをとても悲しく思います。日本が二度とこのような災害に遭わないことを神に祈ります。大きな損失に耐える力を神が授けてくださいますように。」などと書かれています。

■図書室も年々充実

マンガルトール村では、生徒たちのほとんどが本を持っていません。地球の木が設立を手伝った図書室の存在は、このような環境の中で学ぶ生徒たちの大きな助けとなっています。個人からの寄付などもあり、図書室は訪れるたびに本の数や書棚も増え、充実してきているのがわかります。図書室の評判は遠くの村にも及び、「うちの村にも図書室が欲しい」という要望が出ています。

■ニュースレター「ロシ・ラハール」

今年度もロシ・ラハールが4回発行されました。このニュースレターは、紙媒体の少ないネパールで、「幸せ分かち合いムーブメント」のコンセプトを広めるのに大きな役割を担っています。高校では、専門家を招いてエッセイの書き方トレーニングを行ったり、作文コンテストを開催したりととても力を入れています。それが功を奏してか、最近では高校生からの投稿も増えています。

■高校生ファシリテーターが大活躍

「幸せ分かち合い」のコンセプトを理解するためのトレーニングを受けた高校生たちは、自分たちの村と高校を結ぶ地区連絡員として活躍し、リーダーとしての自覚を持つようになります。この高校生ファシリテーターが中心となって、それぞれの村で「幸せ分かち合い」のワークショップを行い、自分たちの村の何を改善したらもっといい村になるかを話し合います。

■自分たちで決めたことは守る

貧困家庭の収入創出プログラムは、このような過程を経て、村人たちの中から生まれました。何が必要かを考えるのも村人なら、誰が最も支援を必要としているかを決めるのも村人たちです。そして、選ばれた人々は、5,000ルピー（6,000円）の融資を受け、カボチャ、ニンニク、キュウリ、トマトなどの野菜を育て、余剰分を市場で売って、収入を得られるようになりました。少額の融資が人々の暮らしに余裕を与えます。そして、2010年12月4日、第1期参加者9人全員が借りたお金を返し、資金は次の参加者たちに引き継がれました。

援助を受けるという受身の参加ではなく、自分たちで決めたことを責任を持って行うという参加のあり方には、村人たちの気概が感じられ、幸せそうな笑顔は、自信と誇りに溢れています。



教師トレーニングに参加する先生たち

■私たちがハッピーに

「幸せ分かち合いムーブメント」は、マンガルトール村の人々だけの幸せの実現を目的としたプログラムではありません。昨年度、地球の木は「しあわせ村民キャンペーン」を実施し、会員の皆さまに「1,000円の寄付でネパールの

村民もあなたもhappyに！」と参加を呼びかけました。このキャンペーンに参加するには、3つの約束事項がありました。「いつも笑顔」「エコなくらしを心がける」「自分も相手も大切に」という約束です。110人の人々が「この約束、いいわねえ」「ステキ！」と賛同して下さいました。参加者の皆さま、キャンペーンはあなたの暮らしにより変化をもたらしましたか？

■今年も楽しい企画がいっぱい

今年度も私たちは、財政面の支援をするとともに、互いに学びあい、幸せを分かち合う、そんな関係を続けていきたいと思えます。スタディツアーなど楽しいイベントを企画しますので、ぜひご参加下さい。幸せ分かち合いチームは、メンバーを募集しています。あなたも新しい開発のモデルづくりをめざす「幸せ分かち合いムーブメント」のプログラムに参加してみませんか？

（幸せ分かち合いチーム 乳井 京子）

*このプログラムはかながわ国際協力基金の助成を受けています。

地球の木設立20周年に寄せて

「幸せ分かち合いムーブメント」の現地パートナーSAGUNの理事カマル・フヤルさんがプログラムがどのように始まり、地球の木の役割は何かを書いてくれました。



「幸せ分かち合いムーブメント」こそ、よりよい社会へのキーワード

1970年頃から「開発」という言葉が頻繁に使われてきました。この言葉は、開発に関わる人々の間で、さまざまに理解、定義され、「開発」をめぐる慎重な議論がなされてきました。しかし、開発を行う側は、対象となる人々が本当に何を必要とし、何を欲しがっているのかに耳を傾けるよりも、むしろ自分たちが立てた計画どおりに物事を推し進めようとする。「第3世界」にとって近代化＝西洋化が最良の開発モデルであるという考えから、「開発事業」のほとんどは経済成長とインフラ整備に焦点を置いていたとの批判もあります。このようなやり方で、数十年にわたって開発が行われてきましたが、今、その結果を疑問視する声が上がりはじめています。それは、「先進国の人々は本当に幸せなのですか？もし幸せでないなら、何のために開発をするのですか？」という問いかけです。

私も開発の仕事始めた頃、同じ疑問を持っていました。「開発の仕事」は人々の暮らしに便利さだけでなく幸せをもたらすものでなければなりません。経済が成長し、インフラが整備されても、それだけで人々を幸せにすることはできないということ、私は自らの経験を通して認識し始めていました。そして、開発とは「幸せを分かち合う運動である」という考え方が私の中に根付き、この考え方を具体的な形にするための活動が始まりました。

それから数年後、地球の木と出会い、私たちが開発について同じ考えをもっていることに気がきました。ちょうどその頃、私はマンガルトール村で幸せ分かち合いのプログラムを始める準備に取り掛かっていましたので、地球の木に「SAGUNとパートナーシップを組んでやってみませんか」とお誘いし、このプログラムが始まりました。あれから4年間、私たちは手を携えて活動してきました。

今では、「幸せ分かち合いムーブメント」のコンセプトが、マンガルトール村の開発ワーカーたちや村人の間に広まってきました。地球の木も私たちSAGUNも、このムーブメントを確かな流れにしていかなければならないという大きな責任があります。これまでのパートナーシップの中で見えてきた、地球の木に担ってほしい役割は、次の3つです。まず第一に、地球の木の皆さんが、マンガルトール村の人々と交流する機会をもっと増やすことです。そうすれば、幸せ分かち合いムーブメントは村人たちにとって、もっと魅力のあるものとなり、その重要性を認識するようになるでしょう。Eメールや手紙などで定期的に意見を交換してみませんか。マンガルトール村にいらして下さったら、もっと触れ合うチャンスがありますよ。

第二に、地球の木の中で幸せ分かち合いムーブメントについて大いに議論してみてください。そうすることでムーブメントへの理解も深まるでしょう。そして、幸せ分かち合いムーブメントのコンセプトを揺るぎないものとするための助言もお寄せください。

第三は、幸せ分かち合いムーブメントのコンセプトの外部への発信です。社会を変えていく過程で最も重要な鍵を握る「幸せ分かち合い」のコンセプトをご一緒に広めていきましょう。（ネパールより カマル・フヤル）

地球の木会員の皆様、こんにちは。日本国際ボランティアセンター（JVC）ラオス事務所の平野です。ご支援いただいているラオス・サワナケート県における森林保全と持続的農業の活動に関連して、今回は「活動困難の村」と「ラオスでの津波被害支援」について書いてみます。

活動困難の村1 <ここで活動していいの!?!>

「村で活動を進めるうち、村長ら村の顔役層がなぜか非協力的となり、研修などのための訪問の旨を伝えても、村人に告知してくれないという状態が2回ほど続きました。実は同村は行政区分上私たちの対象郡であるアサボン郡ではなく、隣接するウドンボン郡に属していたのです。地理的にはアサボン郡に食い込んでおり、編入が検討されていたのですが、ウドンボン郡に属したいと考える村人は、常にアサボン郡行政官を伴って村を訪れるJVCと活動を行うと、同郡に編入されると警戒していたのです。他の村同様同村もアサボン郡行政からの提案を受けて活動対象村となっていたので、別の郡に属していたとは驚き。編入検討段階にも関わらず、同郡行政がJVC対象村として選出してしまったのです。サワナケート県と交わっている事業覚書の中でも、活動郡はアサボン郡とピン郡と明記されており、県とも相談の上で活動は休止することに。その後1年以上してからアサボン郡編入が正式に決まり、先日から活動を再開しました。

活動困難な村2 <植林万歳!?!>

N村の村人には非常に協力的な人も少なくなかったのですが、村長がJVCでの活動に全く関心を持っておらず、研修などのための訪問の旨を伝えても、村人に告知されることがなく、活動実施が困難になりました。ピン郡行政に相談したところ、この村長はかねてよりベトナムのゴム植林企業とばかり付き合い（お金をもらっているらしい）、行政との仕事に関心が薄い、と同じような不満を持っていました。このため、新村長に交代するまでは、一部の活動に絞って活動することとなりました。森を失うこととに憤りを感じている村人が多くいる中で、「ラオスは遅れている、ベトナムを見習って植林などで経済成長するのだ」と主張する村長の存在は衝撃的でもありましたが、これもまた村の現実です。

ラオスでの津波被害支援

東日本大震災と津波、そしてそれに続く原発事故は、ラオス人が目にするメディアでも大きく取り上げられました。スタッフや協働する行政官のほか、村でも「家族は大丈夫か」といった声をかけてくれる村人もいました。また、JVCラオスでは、アジア学院への留学経験もあるラオス人リーダー、フンパンの発案で募金も行われたほか、ラオス正月のパーティーを主催し、県農林局の行政官を招いた際も、募金が行われました。さらには、県知事の主催で、県一番の会議場で人気歌手も招いた催しが行われ、「サワナケート県民より日本に心を込めて」とラオス語で、「ガンバレ日本」と日本語で書かれたTシャツが販売されたほか、寄付やチャリティーオークションで沢山の寄付が集まりました。
(JVCラオス事務所現地代表 平野将人)



たくさんの人が集まった「復興支援パーティー」

メッセージの書かれたTシャツを着た福島での筆者

「どうしてたの？無事だった？」

3月11日、カンボジアへの訪問を翌日に控え、事務所でいろいろと準備をしていました。関内の事務所でも激しい揺れを感じましたが、幸いにも本棚の書類が少し落ちて来た程度でした。空路は翌日から徐々に再開されたものの、状況を考慮してカンボジア行きは一旦中止としました。生活クラブの共同購入で取り組んでもらったシルク小物は、好評で多くの注文を頂きましたが、その内、紺（かすり）のスカートだけ生産が追いつかなかったのです。今回の訪問では、その紺のスカートを受け取るようになっていました。注文して下さった皆さまには、大変申し訳ないことながら配達の遅延をお願いすることになりました。

4月2日、延期となったカンボジア訪問が実現しました。前回の訪問から2ヵ月余り。タケオの職業訓練センターでは、注文してあった紺のスカートがすべて出来上がっていました。今回、注文品を届けるときに、作った生徒たちの写真と一言をのせたお礼のカードを同封しました。「注文してくれた方たちにこんな風にお渡ししたのよ」と話し、そのカードに写っている子に手渡しました。自分たちの作った製品がきれいなビニール袋に入り、カード付きで、注文してくれた人たちの手に渡る……このことがわかれば、作ることの喜びも増し、さらに「次からはもっと丁寧に作ろう」と思ってくれることでしょう。



日本から持参した新聞にじっと見入る

今回の地震については、地震発生翌日にカンボジア現地に訪問中止を伝えるために連絡を取りました。

カンボジアでも大きなニュースとなっていて、すでに日本で何が起きているか皆、知っているようでした。カンボジアでは、その後、季節外れの雨が降り、「放射能の雨だ!」と大騒ぎになったそうです。隣国ベトナムで原発の建設が決まっていることにも大きな不安をもっているようで、技術先進国の日本でもこんな災害になったのに、ベトナムでこのような事故が起こったらどうなるか心配だと話していました。

また、今回の訪問時に震災直後の3月12日、13日の日本の新聞を持っていきました。タケオのセンターでそれを見せるとみんながその新聞の周りに集まり、ずっと見入っていました。まず、カンボジアでは地震がないこと、そして彼女たちにとって新聞自体を見る機会が少ないこと、また、テレビはもちろん、電気もない家の子も多く、日本の惨事に驚いているのか、地震に対する関心なのか、あまりよくわかりませんでした。しかしその新聞はほとんどが写真で、日本語はわからなくても、日本で何が起きているのかは十分伝わったようです。フンパンのHIV陽性のシングルマザーの工房「MDSF」では、私たちが中に入っていくなり、ワーカーの女性が「どうしてたの？無事だった？とても心配していたんだから・・・」と大声で話してきました。いきなり大きな声でまくし立てるので一体何事かと思ったら、私たちのことを心配してくれていたのです。前回訪問時に、工房での仕事と家政婦の仕事に加え、子どもと高齢の両親を抱え必死で何とか暮らしていると涙ながらに話してくれたワーカーです。



「これがあなたよ」

日々の生活に追われ、インターネットや海外のニュースなどには普段あまり関係ないだろう彼女が、テレビでたまたま目にしたニュースで日本の地震を知り、遠い日本にいる私たちのことをこんなに心配してくれていたのだと思うと胸が熱くなりました。日本で彼女たちのことを思ってクラフトを買ってくれる人がいて、カンボジアでも日本の地震のことを心配してくれる人たちがいる。このようにお互い思いやる心が育ってきていることをとても嬉しく思いました。

(カンボジアチーム 筒井由紀子)



所有者が「もう処分OK」と示す標示

床下の泥出しをするCFWのワーカーたち

東日本大震災緊急支援報告

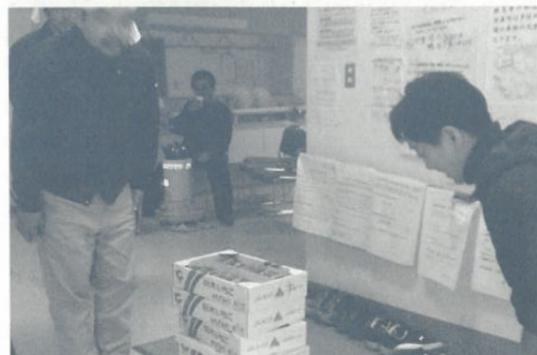
「地球の木緊急支援活動指針」では、地球の木の緊急支援は、緊急から復興の過程で、「人々が立ち上がる」時期に支援すると定められています。今回は日本国内での大災害ということで、3月25日に緊急理事会を開催し、まず任意積立金を取り崩し、緊急支援の募金を募り、できる限りの支援を行っていくことにしました。

東北拠点のネットワークに協力して

被災者支援に関しては、まず現地に駆け付け、情報を得ることが大切です。しかし今回の地震では、被害が広域に及び現地での受け入れが困難であるとの情報があり、被災を免れた山形の「国際ボランティアセンター山形(IVY)」が災害3日後に立ち上げた「東北広域震災NGOセンター」の活動に協力していくことになりました。IVYは、日頃から東北地域の国際協力関係ネットワークの中心となっており、カンボジアへの海外支援のみならず在在外国人支援や開発教育などの活動で実績を挙げています。災害地域近くに拠点を持っているIVYは協力団体として適任である判断しました。

「洗ってすぐに食べられるもの」

4月7日には、地球の木顧問の横川芳江さんが被災地を訪問し、「洗ってすぐに食べられるもの」という現地の要望に応じて、イチゴやプチトマトなど野菜や果物を宮城県女川町の避難所に届けました。甚大で広域の被害ということもあり、現地では、緊急段階を抜け出せないような状況にありました。現地に必要なものや支援も刻々と変わっており、しっかりした状況の把握が必要です。



女川町の避難所へいちごを届ける横川さん

「キャッシュ・フォー・ワーク」

5月11日には、事務局スタッフ2名が次の支援の調査として気仙沼、石巻とその周辺を訪れ、「東北広域震災NGOセンター」のおこなう「キャッシュ・フォー・ワーク」(以後、CFW)を支援することにしました。CFWは復旧事業などに被災者を雇用し、対価として現金を支給するプログラムで、2004年のインド洋津波の被災地でNGO等によって実施され、大規模災害の被災者支援の方法として国際的にも定着しつつあります。気仙沼の現地視察でCFWの雇用者(女性30代)は、「震災で家も仕事もなくなってしまった。何もしないでいるといろいろと考えてしまうので、この仕事ができると嬉しい。やることがあるだけで、全然気持ちが違う」と話していました。被災者の気持ちを支える大切な支援であると考えています。



炊き出して夕飯のおかずを作る

ちょっと「ひと休み」の炊き出し

そして気仙沼で、長く避難所生活を余儀なくされている人たちにちょっと「ひと休み」してもらうための炊き出しもはじめました。地元の人たちと協力して、避難所になっているお寺の人たちの食事を作ります。デザートもつけてちょっとだけ「ごちそう」のメニューです。気仙沼で聞いた被災者の言葉です。「やっと少し片付けが済んだところです。でも私たちにはまだ始まったばかり。支援がどんどん減ってくるのではと不安になります。息の長い支援をお願いします。」

これからも、状況に合わせて、少しでも被災地の人たちの心を支えるような支援に取り組んでいきたいと思えます。(事務局 筒井 由紀子)
※募金の報告や支援の詳細は8ページをご覧ください。

鞍山だより『FROM A』(第3回)

異文化社会の中で震災の知らせに接して…

日本で地震のあった翌月曜日、1年生の授業で一人の学生が紙を持ってきました。そこには、「先生、日本の大地震が起こったことがもう聞かれました。その災害を聞くと、みんな悲しくて心配しました。ところで、ご家族のみんな大丈夫ですか。先生は中国で一人暮らして、かならず家族のみんなのことを心配していて、もし、何か困ることがあったら教えてくださいませんか。私たち、必ず先生を助けて、先生と一緒に日本のみんなの安全のために祈ってます。」とありました。文法・用語の間違ひは、かえって彼女らが辞書を引引き、時間をかけて書いたであろうことを想像させ、心が熱くなりました。2年生の授業でも、授業中の私の表情を見て心配した学生が心のもったメールをくれたり、放課後部室を訪ねてくれる学生たちもいて、彼らの優しさにどんなに救われたかわかりません。CCTVから流れてくる震災のニュースは、日本で見る外国の災害報道の場合と同じで、型にはまっています。外から日本の災害ニュースを見るのは、なんとも複雑な気分になるものです。

いっぽう、3月17日に突然商店から塩が消えました。市民が買いだめに走ったからです。原因はヨード添加食塩。福島原発の放射能問題で、ヨードを採れば放射能が防げるというデマがもととなり、普通の食塩までなくなりました。CCTVは盛んにデマの火消しと食塩の安定供給の情報を流し、買いだめ行動を押さえる報道を繰り返していました。若者たちは、もちろんデマは信じないし、こういった群集心理には批判的であるものの、CCTVの報道には冷ややかで、自分の親が塩を買いだめするのは容認します。よく言われ



「塩は既に売り切れました」

活動日誌(3月~5月抜粋)

- | | | | |
|--------|---------------------|--------|----------------------|
| 3月3~4日 | クラフト販売(大丸デポー) | 18日 | 第9回ランチ連絡会、 |
| 7~12日 | 地球の木カフェ at 遊士 | 20・22日 | 監査 |
| 10日 | 第9回理事会 | 22~23日 | クラフト販売(東戸塚デポー) |
| 11~12日 | クラフト販売(茅ヶ崎デポー) | 25日 | 教員研修に講師派遣(横浜市立平楽中学校) |
| 24日 | 臨時理事会 | 26日 | 第12回理事会 |
| 28日 | かながわ復興支援ネットワーク運営委員会 | 5月 7日 | 国際学習出前講座(横浜市立平楽中学校) |
| 29日 | 第10回理事会 | 11日 | 被災地視察 |
| 30~31日 | クラフト販売(つつじが丘デポー) | 16日 | 第10回ランチ連絡会 |
| 4月1~5日 | カンボジア・タケオ訪問 | 17日 | 第13回理事会 |
| 7日 | 被災地視察(顧問・横川) | 18日 | 被災地視察 |
| 6~7日 | クラフト販売(ライフタウンデポー) | 25~26日 | 被災地炊き出し |
| 12日 | 第11回理事会 | 28日 | 地球の木総会、田島征三さんおはなし会 |
| 15~16日 | クラフト販売(はしどデポー) | | |



作文授業で個別指導中の筆者

るように、自分の家族を守ることがなによりも大事という、彼らのメンタリティーを象徴した出来事と言えるかもしれません。

昨年秋、尖閣諸島問題が日本のマスコミを賑わせたころ、「メディアリテラシー(情報媒体を読み解く力)」について考えさせられました。今、日本では原発報道について取りざたされていますが、これらのことは日本人が公共放送に対して信頼と期待を寄せていることの裏返しなのだ、ここ中国でのCCTVに対する中国の人々の反応から気づかれます。私も、今回の震災報道をこの異文化社会の中で受け取りながら、メディアリテラシーとか異文化理解と言った言葉の重さをあらためて感じている今日この頃です。(注)CCTV…中国中央電視台(国営放送テレビ局)

☆斎藤さんの鞍山だよりが書かれているブログ「FROM A」
<http://d.hatena.ne.jp/key-chi/>

地球の木カフェ 鶴見に行く

3月8日~11日の「地球の木カフェ at 遊士」に大勢お出かけ下さいましてありがとうございました。

8日・9日はカンボジアの支援先・タケオ職業訓練センターの少女たちの話、10日はアジアのアンティーク織物についての話、11日はラオスの話をお伝えしていました。

遊士さんのマクロビオテックのランチも素晴らしく美味しかったです。

ところがちょうど「ラオスの日」があつた東北大震災の日だったので。ラオス料理のランチを作ってくださったビルンさんの、難民として日本においでになった体験を話して下さっていた時いきなり建物が揺れ始めました。ビルンさんはテーブルの下にずっともぐっておいででした。後に聞きましたらラオスには地震はないそうです。帰宅後の報道で大変な事態に驚くことになりました。

(クメールシルクチーム 大藪 明恵)

東日本大震災募金にご寄付をいただき、 ありがとうございました

今回の東日本大震災の緊急募金に対して、多くの方々から、たくさんのご寄付をいただきました。心より感謝申し上げます。地球の木では、「何かできることをしたい」という皆様方の強いお気持ちを、被災された方々に届けるよう緊急支援を行ってまいりました。復興までには、なお時間がかかると思われまふ。第1次緊急支援としていただいたご寄付で、引き続き、厳しい状況に置かれている被災者の方々へ、心を尽くした支援を行ってまいります。

- ◆ 支援金合計 2,399,875円 (5月末現在)
- ※ 延べ240名の方々からご寄付をいただきました。
- ※ 東日本大震災への支援金につきまして、会員の方からのご寄付の領収書は9月の会報誌に同封いたします



◆ これまでの支援内容

- ・ 3月28日 「東北広域震災NGOセンター」へ、緊急支援金として30万円を送付
- ・ 3月31日 グンゼ株式会社に協力を依頼し、年配者向けの下着1,000枚を避難所へ送付
- ・ 4月 7日 現地訪問を実施。「すぐに食べられる生の野菜・果物」が欲しいとの要望を受け、イチゴ、プチトマト等を避難所に持参。
- ・ 5月19日 「東北広域震災NGOセンター」がおこなう「キャッシュ・フォー・ワーク」に60万円を拠出。
- ・ 5月25日 気仙沼の避難所で炊き出しを実施。

東日本大震災支援報告会

数回にわたるこれまでの被災地の視察報告と支援の内容、炊き出しの様子などをお伝えします。

日 時：6月25日(土)
10:30 ~12:00
場 所：地球の木事務所



あーすぶらざ国際平和展示室に 行ってみよう

「あーすぶらざ」5階に常設の国際平和展示室があります。過去の戦争を見つめ、現在の地球規模の課題を知り、地域からの国際協力を考え、未来に向けて「共に生きる平和な国際社会」を考えることができるように構成されています。この中のNGO活動紹介コーナーに、地球の木のネパールのプログラム「幸せ分かち合いムーブメント」がスライドショーで紹介されています。ぜひ一度足を運んでみてください。

場 所：あーすぶらざ(神奈川県立地球市民かながわプラザ) 5階国際平和展示室
(JR根岸線「本郷台」徒歩2分)
開館時間：9:00~17:00(月曜休館)
観覧料：小中学生100円、高校生・20歳未満の学生・65歳以上300円、大人450円

生活クラブ40周年記念事業

生活クラブ40・30 (フォーティ・サーティ)

地球の木は下記の日程や各デポーでマジカルバナナクイズ、活動紹介、クラフトグッズの販売を行います。ぜひお近くのデポーにお出かけください。

- 7月 7日(木) ・ほんもくデポー・南林間デポー
- 7月 8日(金) ・高津デポー
- 7月 9日(土) ・綱島デポー・宮前平デポー
- 7月10日(日) ・すすき野デポー・はしどデポー

第29回開発教育全国研究集会

日 時：2011年8月6日(土)・7日(日)
会 場：JICA地球ひろば(東京都渋谷区)
参加費：各フォーラム 会員：3,000円 一般：4,000円

第1部：実践フォーラム 8月6日(土)
対 象：開発教育、国際協力などに関心のある方
第2部：研究フォーラム 8月7日(日)
対 象：開発教育の実践者、研究者など
地球の木は第1部実践フォーラムの自主ラウンドテーブルで、「小学生と『マジカルバナナ』」と題し、小学校で行った事例を紹介し、参加者と意見交換します。

地球の木は「認定NPO法人」格を取得しました

2010年7月16日以降のご寄付に関しては、皆様が確定申告で寄付金を所得控除できるようになります。また、神奈川県と横浜市の個人住民税からも控除となります。